

「無類に郷土を愛した作家のように思われている」織田作之助の文学が実は「故郷喪失の文学」であったという安田義明氏の指摘（「故郷と異郷」昭55）は示唆に富んでいる。そのようなものとしての「故郷」＝大阪の下町を描いた織田の代表作の一つに『わが町』がある。

『わが町』には昭和17年11月の「文藝」に掲載された短編と昭和18年4月単行本化された長編の二種のテキストが存在する。両テキストとも中心となる物語の展開や主だった登場人物は共通しており、主人公は『立志伝』（昭16・7）に登場していた佐渡島他吉である。長編には短編の内容にはない『夫婦善哉』（昭15・4）の続編としての要素、さらに『婚期はづれ』（昭15・11）の内容が付加されている。また他吉が大阪に帰ってくるまでのフィリピンでの履歴を描いた部分は当時出版されていた「南方開発」についての文献が複数下敷きとされていると考えられる。大谷晃一氏が指摘（『織田作之助伝』昭48）したように本作の主たる舞台「河童路地」は織田の実際の故郷・大阪上汐町に町の構成まで酷似しているのであるが、織田は単行本『わが町』の「後記」に「もとよりこの町は作者にとつて架空の町である。」と書く。織田は様々な質の前テキストを貼りあわせることによって実在の故郷を「架空の町」＝「わが町」に仕立て上げていたのである。そのことを具体的に明らかにし、織田の「故郷」に対するスタンスの取り方と、その意味を考察したい。

（大阪教育大学附属高等学校池田校舎教諭）